

「記録的暴風」による被害や影響を首都圏各地にもたらした台風15号の上陸から、1週間が経過した。

山田健太のジャーナリズム時評

8月の記事から

国や自治体主催の追悼式をめぐり、8月には公式・非公式のさまざまな行事が行われることから、それを報じることは必要なことだ。そして、行事をきっかけとして企画が組まれることもよくあることだろう。似たような「きっかけ」記事としては、裁判の判決を機に、改めて当該事件を振り返え

歴史を継承

「8月ジャーナリズム」という言い方がある。日本の多くのマスメディアが第2次世界大戦の敗戦（終戦）日である8月15日、あるいは広島・長崎の原爆投下に合わせて、戦争・平和にかかわる特集記事や番組を数多く報じる現象をさす総称だ。どちらかと言えば、12月の開戦でもなければ、各地の大空襲でもなく、むしろ8月に「のみ」という特別な組まれることを、都度、揶揄する意味合いが強いともいえる。実際本紙でも、8月以降の月に入っても、関東大震災に関わる記事も含め、戦争や平和を考える数多くの記事が掲載されてきている。この〈戦争〉を伝える「節目」報道の意義は何か、その意味は果たされているか、考えてみたい。（毎月第3水曜掲載）



やまた・けんた 専修大学ジャーナリズム学教授・学部長。専門は言論史、ジャーナリズム研究。日本ベンチャー専務理事。著書に「沖縄報道」「法とジャーナリズム 第3版」「現代ジャーナリズム事典（監修）」「放送法と権力とジャーナリズムの行方」。

戦争をどう報じるか

戦争・平和にかかわる特集を組む本紙記事



しかも裁判記事は、突発的な事故とは違い「準備」が可能であるだけに、新人記者も含め読者レベルで新たに勉強し直し、先書記者に過去の経緯を尋ね、その経緯を共有する絶好の機会でもある。こうした「継承」作業を、紙面上のみならず、社内でも進められるべきだ。

伝える工夫

このことは、すでにいわれて久しい、「戦争」を伝えることの難しさに直結する。大戦終結から74年、その体験者は極端に先細りの状況だ。今年の全国戦没者追悼式典で、参列者の遺族のうち戦後生まれが初めての割合を超えたと報じられている。それは、戦争を直接知る人が急速に減少しているということであり、戦地に赴いた体験者の大半が90歳代となつて、実際に話を聞く機会も極めて限定的になっている。いわゆる「語り部」としての活動の中核は、いまや直接体験者ではなく、次の世代に移行しつつある現状もある。

が進み、交戦論が繰り返して語られる事態を主としている。社会として「戦争」は特別に意識しないと消え去り忘れ去られ、時に肯定される存在となつていくという点だ。2010年の広島市教育委員会の調査で、原爆投下日を学ばれた小学校高学年は83%、中学生でも55%にも落ちた。こうしたこともあり、広島カープは当日、選手全員が証書に「80」をつけて試合を行っているという有名な話だ。

こうした状況に抗う方々の一つが、新聞をはじめとするジャーナリズムの活動であつて、いかに当事者の話を聞き、それを可能な限り事実検証し、点の記憶を面として記録し、戦争の全体像を後世に継承していけるかであろう。もちろんこうした作業は、新聞だけではなく博物館も含めて研究者も、そして何よりも教育現場での、地道な積み重ねの結果、初めて社会的な継承が実現するものだ。まさに、とりわけ若い世代に、戦争の真相をどう伝えるか、社会全体で考える重要なテーマであるに違いない。

そうしたなかで本紙の今年の連載「平和つなく 戦後74年の夏」は、いかに継承するかに重点を置き、その難しさの中で尽力する人に焦点を当て具体的に紹介する重要な試みだつた。

むしろこの企画をきっかけに、取材記者がそして紙面全体としても、縦にも横にも広がりをもった展開を今後期待したい。たとえば、連載のうち1回は沖縄とチリガマ爆撃事件を例に、平和教育を語っている。先述の通りこれは他の自治体でも、あるいは反ナチ教育を行つたドイツにおいても大きな課題になつていくテーマだ。あるいは沖縄の場合、平和教育の前提となる学ぶ場の確保自体が、経済的貧困の拡大の中で危ぶまれている。それもまた、現在の県内

の一等地を米軍基地が占め、全国の米軍専用施設の7割以上が集中する、過去から続く沖縄の状況と無縁ではない。

あるいは、過去の戦争を「自分事」としてとらえることも重要だ。自由は戦争の最初の犠牲者といわれるように確かに新聞は戦争中、大本営発表を強いらられ、報道の自由という手足をもぎ取られた「被害者」に遭い、しかし一方で、その報道によって国威を鼓舞し、戦争への道を駆り立てた張本人であり、さらに言えば軍部と一体化してプロパガンダに加担した「加害者」でもある。そうした歴史をきちんと理解してこそ、同じ過ちを繰り返さないという理念が、初めて現実のものとして力をもちうる。その意味では8月までで133回を数える、長期連載「神奈川新聞と戦争」は、大塚重彦が意義深い取り組みだと思つた。

緩やかな合意

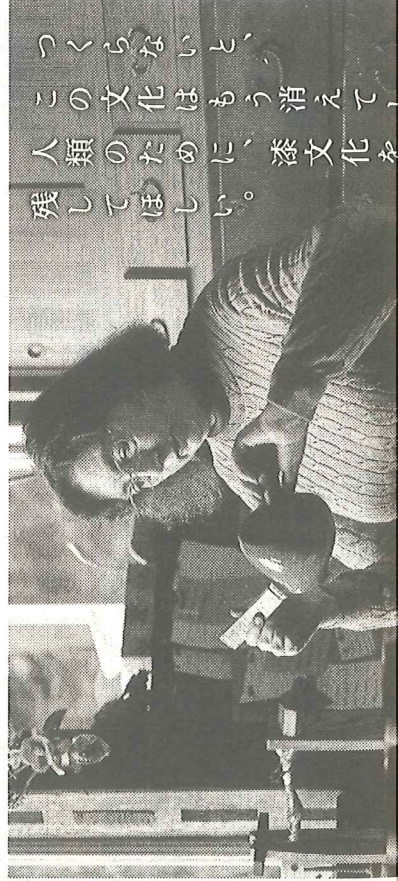
冒頭に「8月ジャーナリズム」は否定的に使用されると書いた。しかし今年が改元によって、戦争の時代であつた〈昭和〉は一段と遠ざかり、昭和史が同時代史から過去の歴史に移行しつつある、ターニングポイントでもある。それだけに、つい70年前に日本が経験した戦争を、新聞ジャーナリズムが時間と労力をかけて取り組むべき最重要課題の一つと再認識されるべきであろう。こうした明確な意識化が、伝えることの意味を高め、時期を問わず日々のニュースにおいても、歴史的視点が育まれることに繋がる。その結果、読者を通じ社会全体に「戦争は嫌だ」といった「緩やかな合意」が生まれることになると期待したい。それが、いま日本国内でも大きく揺らいでいる、自由と民主主義を維持する、一番大切な基礎だからだ。

※カナロコでアリス解説も

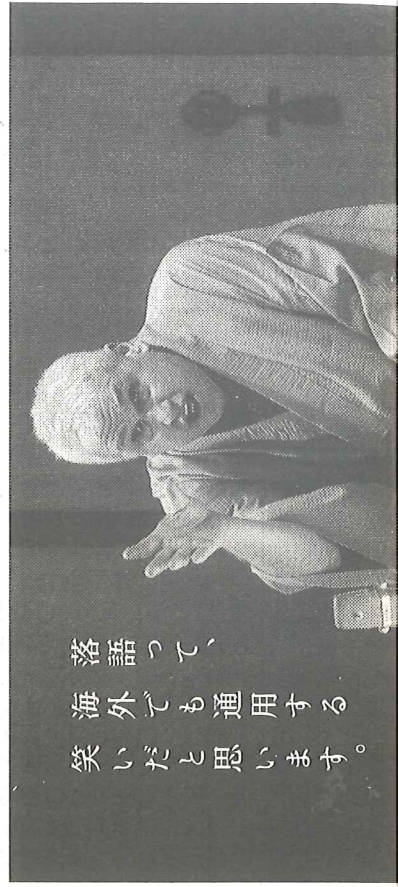
書籍化のお知らせ

連載「時代の正体」の書籍化第3弾「時代の正体vol.3 忘却に抗（あらが）い、語りつつける」が現代理想潮新社から刊行されました。相模原障害者殺傷事件やヘイト

スピーチ、性差別の美態に多様な視点から迫っているほか、改訂や道徳教科化を巡るルポなどを収録。1800円（税別）で全国の書店で発売中。



つくらないと、この文化はもう消えて、人類のために、漆文化を残してほしい。



落語って、海外でも通用する笑いだと思えます。

性別や国に関係なく、尊敬し合うことが非常に大切です。

平和を具次元は7月に減量でア一つで気温がらツケる。もう「あれ」(基)

早期復旧へ支援強化を